

聖書：使徒の働き 1章 12～26節

説教：復活の証人

1 エルサレムで

1) 聖霊のバプテスマを待つ

続けて使徒の働きを見ていきます。

主は十字架で苦しみを受け私たちの罪の身代わりとなってさばきを受け、死んでくださった三日の後によみがえられ、四十日間、弟子たちに現れてくださいます。その時主はこう言われました。4節真ん中から5節。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」そして8節。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」このように言われてから、主は天に上げられていきました。そのことが起きたのは、エルサレムの町のすぐそばにあるオリブ山です。

この三月にイスラエルに行ったとき、このオリブ山にも行ってきました。山と言っても小高い丘のような形をしていて、そこに立ってエルサレムの方を眺めると、町を歩いている人が見えるくらいでした。オリブ山とエルサレムはこんなに近いところにあるのかと実感しました。

2) 心を合わせて祈りに専念していた

弟子たちはイエスのことばに従ってエルサレムにとどまります。そこで何をしていたか。14節にこうあります。「この人たちは、

婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。」

マリヤは、イエスが十字架につけられたとき、そのすぐそばに立って一部始終を見なければならなかった人です。だれでも母親であるなら、それがどんなにつらいことか想像できるはずです。それに加えて人々は口々にうわさしたでしょう。「マリヤの息子は新興宗教の教祖になろうとして、人々の恨みを買って、殺されてしまった。なんとこのろわれた親不孝者だろう。」そんなうわさを立てられたら普通は隠れたくなる。イエスの弟子たちとはもう一切関わりを持ちたくない。そうなるのが自然でしょう。

ところが、母マリヤとイエスの兄弟たちが弟子たちといっしょに集まり、みな心を合わせて祈りに専念していたとあります。このイエスの兄弟たちも最初から熱心な信者であった訳ではない。以前はどうだったのか。村の人たちや親戚から「おまえの所のイエスは頭がおかしくなったのではないか」と言われて、肩身が狭くなりイエスを家に連れ戻そうとしたこともあったのです。そんな彼らがどうして今こうなるのか。聖書には一切説明がありません。自然に変わったとはとても思えない。何かがあったはず。それはなんであったのか。そのことを考えるために、きょうのもうひとりの登場人物ペテロに目を留めていきます。

2 ペテロ

1) 変えられたペテロ

ペテロはもともと漁師でしたが、あるときイエスに声をかけられ、それ以来弟子として活躍し、自分こそイエスの一番弟子であるとのプライドを強く持っていました。あるときは、「先生が死ぬときは、私もお伴します」と言い放つほど、自分に自信があった。ところが、いざイエスが逮捕されると彼がどうなったか、皆さんはご存じです。裁判が行われている庭にこっそり隠れていたとき、突然「おまえはイエスの仲間だろう」と言われると、急に怖くなり「そんな人は知らない」と三度イエスを否定してしまう。一番肝心なときにイエスを捨てて逃げてしまいました。もうこれは取り返しができません。謝って済む話ではない。イエスの弟子として生きることがもうできない。それで、漁師の生活に戻り、イエスと過ごした三年半のことはすべて封印することにしました。

ところがペテロは今どこにいますか。何をしていますか。故郷のガリラヤ湖ではない。エルサレムにいます。彼は漁師ではない。イエスの弟子へと再び戻っていく。ただ戻ったのではない。彼は集まっていた兄弟たちの先頭に立ち、ひとつの提案をしていく。旧約聖書を引用し、自分たちが今やるべきことは何かを力強く説いています。彼が自分の口で、イエスを知らないと言い張り、イエスを捨てて逃げたのは、つい四十日前のことです。もちろんそのことは集まっている人たちも全部知っている。こんな場合、白い目で見るはずです。ところが実際はどうか。ここに書かれているとおりで。人々はペテロのことばに真剣に耳を傾ける。いったいペテロに何が起きたのか。何がペテロを変えていったのか。

2) よみがえられた主に出会う

ルカの福音書 24 章 33, 34 節にその事情が書かれています。「すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、『ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現された』と言っていた。」ふたりというのは、エルサレムの近くのエマオという村に用事があって出かけていた弟子たちのことです。このふたりもよみがえられたイエスに出会い、そのことを報告するためにエルサレムに急いで戻った。そうしたらそこでもシモン・ペテロがよみがえられた主に出会ったと大騒ぎになっていた。そのような内容です。

これが種明かしです。ペテロがこんなに変わったのはなぜか。彼が、よみがえられた主に出会ったからです。その時以来、以前のようにではない、ほんとうに成熟した者へと変えられていったのでした。

これはペテロだけではありません。イエスの母マリヤもイエスの兄弟たちも同じ経験した。よみがえられた主に出会って初めて聖書のみことばを悟りました。聖書にはこう書いてあった。「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえる。」最初は何のことかわからなかった。でも今はわかる。イエスが最初からお話しされていたとおりで。むなしいことを信じるのではない。もっとも確実なことを自分たちは見ました。もうなにも疑うことはない。だから人の目を気にすることなく、人のうわさに心を痛めることもなく、みな一つところに集まるのです。みな心を合わせて祈っているのです。ここに集まっているのは、全員よみがえられたイエスを目撃した人たちと考えて間違いないでしょう。

3 使徒職をつぐ者

1) 使徒をお選びになるイエス

そんな兄弟たちの間に立ってペテロは一つの提案をします。ユダが脱落してしまったので、一人欠員が出た。その欠員を補うために自分たちの中から一人を選ばなければならない。そう言っています。でも、どうして欠員を補充する必要があるのでしょうか。十二人でも十一人でもたいした変わりはないのではないか。ペテロがここまでこだわるのですから、何か理由があるはずです。

そもそも使徒という身分は誰がいつ制定したのか。元をたどるとルカの福音書 6 章 12, 13 節に突き当たります。「このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。」このあとに十二人の名前が具体的に記されています。

このとき使徒が選ばれました。イエスが弟子たちの中から特別に選んだ人たちです。どんな基準で選ばれたのかは書かれていません。山に行き、一晩中祈りながら選んでいます。思いつきや、好き嫌いで選んだのではないようです。十二人という数字は、イスラエルの十二部族に由来していると言われていきます。あるいは、十二という数字は聖書においては完全数とも言われます。「完全」という意味を込めてわざわざ十二人を選んだと言うこともできるでしょう。

ペテロは祈っている中で、イエスから委ねられた使徒職の重要性に気づきます。ユダが脱落した結果、十一人のままになっているのはまずい。使徒職は十二人であるべきではないか。それでペテロの提案は受け入れられ、

くじの結果マッテヤが新しく使徒に選ばれます。

2) 復活の証人として

このようにして十二人がそろいました。25 節に「この努めと使徒職の地位を継がせるために」とあります。使徒職の努めとはいったいなんでしょう。このとき少なくとも兄弟と呼ばれる人たちは百二十人はいたようですから、だれかが全体を治めなければなりません。その任にあたったのが使徒であったのか。確かにそのような面があります。

でももしそれだけであるなら、なにもわざわざこんな大騒ぎすることはありません。ペテロ自身が、はっきりと使徒職の努めを定義しています。22 節。「すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間に、いつも私たちと行動をともにしたものの中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」ひとことでまとめれば、イエスの復活の証人、それが使徒職の重要な使命であると言っています。

なぜ復活の証人なのでしょう。なぜ十字架の証人ではないのでしょうか。いま見てきたとおりです。ペテロは何によって変わったのですか。イエスの母マリヤもイエスの兄弟も、何によって変えられていったのか。よみがえられた主に出会ったとき、全員が変えられていきました。もちろん主が十字架で死んでくださったことも大切なことですが、私たちが土台から根こそぎひっくりかえされるように変えられていく出来事。それが主のよみがえりなのです。それを目撃した人たちが、使徒職の努めを受け継ぎ、教会の土台となっていきます。

3) もし復活がなければ

私たちが最も恐れているのことは、数え上げればいろいろあるでしょう。でも突き詰めていけば、最後は死という問題に絞られています。どんなに努力してりっぱな学校に入り、優秀な成績で卒業し、人もうらやむような職業に就き、幸せそうな人生を送っても、どんな名声を手にしても、すばらしい家族に恵まれたとしても、人はいつか死ぬ。そこで終わり。誰もが知っている事実です。いったい人は何のために生きているのか。私は若いとき、このことで悩みました。死んで終わりならば、自分の人生にどんな意味があるのか。生きる目的がわからないので、何をしていたのかかわからない。前に進めない。大学に入ったけれど、勉強する目的がわからないので学校に行けなくなる。それ以来、生きる意味を求めてあちこちさまよい歩きました。結局最後にたどり着いたのが、聖書でした。最初は夫婦の問題をきっかけにして飛び込んだ教会でしたが、牧師から聖書の学びをしませんかと誘われて読んでみた。驚きました。私が知りたいとずっと願っていたことが、全部ここに書いてある。それで今から二十三年前のクリスマスに受洗をしました。

キリスト教では救い主は死からよみがえられた。そして私たちも一度死ぬけれど、死からよみがえり、永遠のいのちをいただく。と、どうどうと主張します。ばかげた話だ、頭がどうかしている、と二千年前の人たちも笑いました。それでも十二人の使徒たちは、よみがえられたイエスをあかしし続けます。よみがえれたイエスを目で見ただけからです。イエスの御からだに手で触れたからです。

もし復活がなかったのなら、私たちはなお

やみの中でさまようだけだったでしょう。生きる意味がわからないままだったでしょう。私たちがいま、使徒たちを通して主がよみがえられたとの証言を聞くことができる。それがどれほど私たちの人生にとって幸いであるのか、その恵みを覚えたいと願います。